

第4章 「連携・接続」で大切にしたいこと

就学前施設では、遊びを通して、「やりたい」と思うことを工夫したり粘り強く挑んだり他者と一緒に取り組んだりしながら実現する力や、困っている他者に優しく声をかけたり手を貸したりする思いやりの心、他者との関係の中で「折り合い」を付け自分の気持ちを調整する力、健康で安全な生活を送る習慣や態度など、「小学校以降の生活や学習の基盤になる資質・能力」や「生涯にわたる人格形成の基礎」を培っています。

小学校では、就学前に培われた資質・能力の上に、児童期の発達の特性を生かして、人・もの・ことの真理を求めた「教科等の学習」を通じた教育を実践していくことになります。

それぞれの段階の子どもの発達の特性と教育の特徴を相互に理解することで、学びの環境づくりや働きかけがより多様になり、就学に対する不安感や入学後の小学校生活や学習への戸惑い等が軽減・解消されるとともに、就学への期待感や入学後の生活や学習への意欲・主体性等の育成につながっていきます。ここに「連携・接続」のねらいや意義があるのではないのでしょうか。

これまでの章では、「連携・接続」の経過や実施・推進に向けた当センターの取組を紹介してきました。第4章では、就学前施設や小学校で「連携・接続」を進める際にどのようなことを大切にすればよいのかという視点で、これまでの取組を通して見えてきたことをまとめました。

第4章 「連携・接続」で大切にしたいこと

1 研修を通して、教職員の意識化・実践化を図る

(1) 研修会や研究発表会等に参加する

当センターでは、第2章と第3章で紹介したように、平成30年度から、就学前施設と小学校の連携や就学前教育と小学校教育の接続の推進を目的とした研修や研究を実施しています。

このような研修や公開授業・公開保育、研究発表等の機会を活用していただくことによって、「連携・接続」の必要性やねらいの理解、進め方のヒント等を得ることができます。

研修や公開授業・公開保育、研究発表等の案内をご覧の上、まずは管理職や「連携・接続」を担当の方が研修を受けたり、授業や保育を参観したりしてください。続いて直接の実践者である教職員に案内していただき、施設内全体で「連携・接続」について理解が進むようになればと考えています。

(2) 施設内研修や合同研修を実施する

当センターや外部で研修した内容を各施設で他の教職員に伝達し共有していただくことも大切なことです。研修時にお渡ししたパワーポイント資料と出席者が書き込んだメモをセットにして供覧していただく研修や、職員打合せや職員会議後のミニ研修の形で伝達することも工夫の一つです。また、この「取組まとめ」を参考にして各施設内で研修をしたり、講師を招聘して近隣の就学前施設と小学校で合同研修として実施したりする方法等もあります。

既に子どもの交流会を実施している施設では、当該年齢のクラスや学年・学級の担任にとどまらず、全ての教職員が交流の様子を参観するようしたり、全体の年間計画に位置付けて取組を共有されたりしています。とても有効な方法です。

以上のことも参考にしていただき、教職員の「連携・接続」の意識化・実践化を図ってください。

2 相互参観を通して、子どもの姿や育ち、学びを共有する（教職員の交流）

保育や学習の様子（内容や子どもの姿）を見合うことは、相互理解の第一歩です。小学校の先生方にとって、乳幼児期の「遊び」の重要性や子どもの育ちの過程を見据えた保育者・指導者の環境づくり・教育的意図をもった働きかけ、保育案等については、十分な理解が得られていない面もあります。

公開保育後にわずかな時間でも、保育のねらいや、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

〔10の姿〕に照らし合わせて、子どもの姿や学びをどのように受け止めるのか等、就学前施設の教職員が小学校の教職員に（その逆も）説明し（大学教授等有識者に説明・助言してもらうと一層効果的です）、施設種別を越えて感想や意見を交流する時間を設けることが、相互理解や



学びの共有につながっていきます。

公開保育で見た子どもの姿を題材にして、一人ひとりの子どもが「遊び」を通して「何を学んだのか」、またその学びが「小学校での生活や学習のどこにつながっていくのか」等を意見交流することで、「発達や学びの連続性」や「教育の一貫性」が見えてきます。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕は、その際の一つの有効な視点になります。



就学前教育、小学校教育、それぞれに役割やねらいがあり、めざす子ども像があります。小学校教育に就学前教育を合わせるのではなく、また就学前教育に小学校教育を合わせるのでもありません。それぞれの段階に応じた教育の役割やねらいを基盤に置きながら、互いの教育や子どもの育ちの姿を理解した上で、教育・保育の方法、働きかけの内容や仕方、学びの環境づくり等を実践に活かすことで、子どもの学びはより豊かになると考えます。この積み重ねが、互いの教育の質の向上につながっています。

まずは、公開保育や公開授業（授業研究）等の機会があれば、案内し合い、参観し合うようにするのも、つながりを作る一つの方法です。

そして、就学前教育における「5領域」と小学校教育における「教科」の内容の関連性を探り、教育課程や全体計画に反映させることでさらに深くつながっていくのではないのでしょうか。これについては、第4章4 “〔3つの柱〕と〔10の姿〕で教育課程をつなぐ”を参照してください。



3 子どもの交流は、互いのねらいを明確にして取り組む

(1) 遊び（活動）を通して

多くの小学校では、1年生が自作した玩具等で遊びのコーナーを作り、5歳児を招いて一緒に遊ぶ取組を実施されています。

小学校側には、玩具を作りコーナーや遊び方を工夫したり、自分より年下の子どもに楽しく遊んでもらうためにどのように接したらよいのかをグループや学級・学年全体で話し合っ

たり等、ねらいに即した多くの学びと育ちが期待できます。

就学前施設側はどうでしょうか。小学校のお兄さんやお姉さんと一緒に遊ぶことで、やがて進む学びの場の雰囲気や学びへの期待感、優しいお兄さんやお姉さんがいることでの安心感などの感得・体得が期待できます。

さらに、相互の教職員が、互いにその活動や学習のねらいや展開、役割を共有し、その活動や学習を共に作る意識、共に子どもたちの活動や学習を援助し支援する意識と指導者・保育者の具体的な実践が合わさった時、より一層の豊かな活動と子どもの育ちが生まれます。



また、活動や学習を通して、「育みたい資質・能力」〔3つの柱〕や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕を基に、子どもたちにどのような資質・能力が育ったのか、どのような姿が見られたのかを振り返ることで、次の遊びや学習、「連携・接続」の取組につながっていきます。こうして就学前施設と小学校がそれぞれに得るものがあること（互恵性）を感じることが、次の取組への意欲や内容の向上につながっていきます。

保育案、指導案に、互いのねらいや活動、保育者・指導者の援助や支援を記載したり、期待される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕などを記載したりすることで、「連携・接続」の取組が明確化・可視化できます。（第3章参照）

何より、当日に至る計画の段階で双方の教職員が、日常の子どもの姿や育ちへの期待を込めた考えや工夫を出し合うことこそが「連携・接続」そのものだと考えます。

子どもの交流は、小学校を場にする取組もあれば、就学前施設を場にする取組もあります。また1年生と5歳児の交流もあれば、異なる学年や歳児との交流もあります。

小学校と就学前施設との距離（立地状況）や、「連携・接続」のこれまでの経過や実施状況等、様々な実態があります。子どもの交流だけでなく、各施設が連携担当者を位置付けて、「できることから実践してみる」「今より一步つながりを深める・広める」ことをめざして取り組めば、互いの教育理解は進み、子どもたちの充実感・達成感は増していくのではないのでしょうか。

また、こうした交流の取組が当該学級・学年担当者、管理職や連携担当者だけにならないよう、他の教職員に交流の様子を伝えたり、参観研修の機会にしたりすることで、組織的な取組として位置づけて取り組むことも大切なことです。

(2) 学習参観を通して

就学前施設の教職員が、1年生の学習の様子を参観したり、生活や学習の一部を体験したりすることで、就学前の子どもたちに小学校での生活や学習への安心感や期待をもたせることができます。また、就学前施設の教職員にとっては、小学校に就学した子どもたちの成長の様子を見ることができるとともに、小学校教育を理解する機会にもなります。

〔交流例〕

○ 1年生

- ・小学校のプールで、5歳児と水遊びをする。

- ・小学校の音楽集会で、5歳児が歌を披露する。
- ・学習参観
- ・学校案内（学校探検）

○ 2年生

- ・企画した様々な遊びのコーナーに5歳児を招く。（〇〇フェスタ）
- ・育てた芋を一緒に掘る。
- ・「お芋パーティー」に招く。



○ 3年生

- ・作品展に5歳児を招待して一緒に鑑賞する。
- ・小学校の運動場で鬼ごっこをして遊ぶ。

○ 4年生

- ・5歳児を呼んで、パソコンでカレンダー作りをする。
- ・自作の紙芝居を幼稚園で披露する。

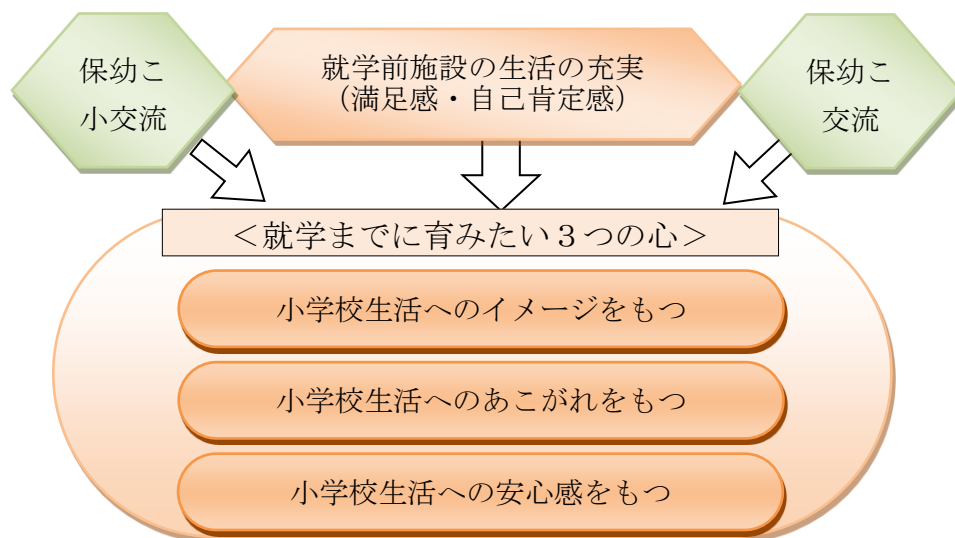
○ 5年生（次の年に新1年生を迎える学年）

- ・5歳児と一緒に「体ほぐしの運動」をする。
- ・給食交流会（準備から後片付けまで一緒に）
- ・学校探検・学習体験



○ 6年生

- ・幼稚園で絵本の読み聞かせをする。
- ・小学校のプールで、5歳児と水遊びをする。
- ・5歳児と一緒に花を育てる。



交流会や学習参観、学校探検等、様々な体験活動を通して就学前の子どもたちは小学校生活への「イメージ」や「あこがれ」を抱き、安心感が高まります。これらの心情、意欲、態度を育むことが、小学校教育への円滑な接続につながっていきます。

小学校では、就学してきた子どもたち一人ひとりがもつ「イメージ」や「あこがれ」「安心感」を大事にして小学校生活につなげていただきたいものです。

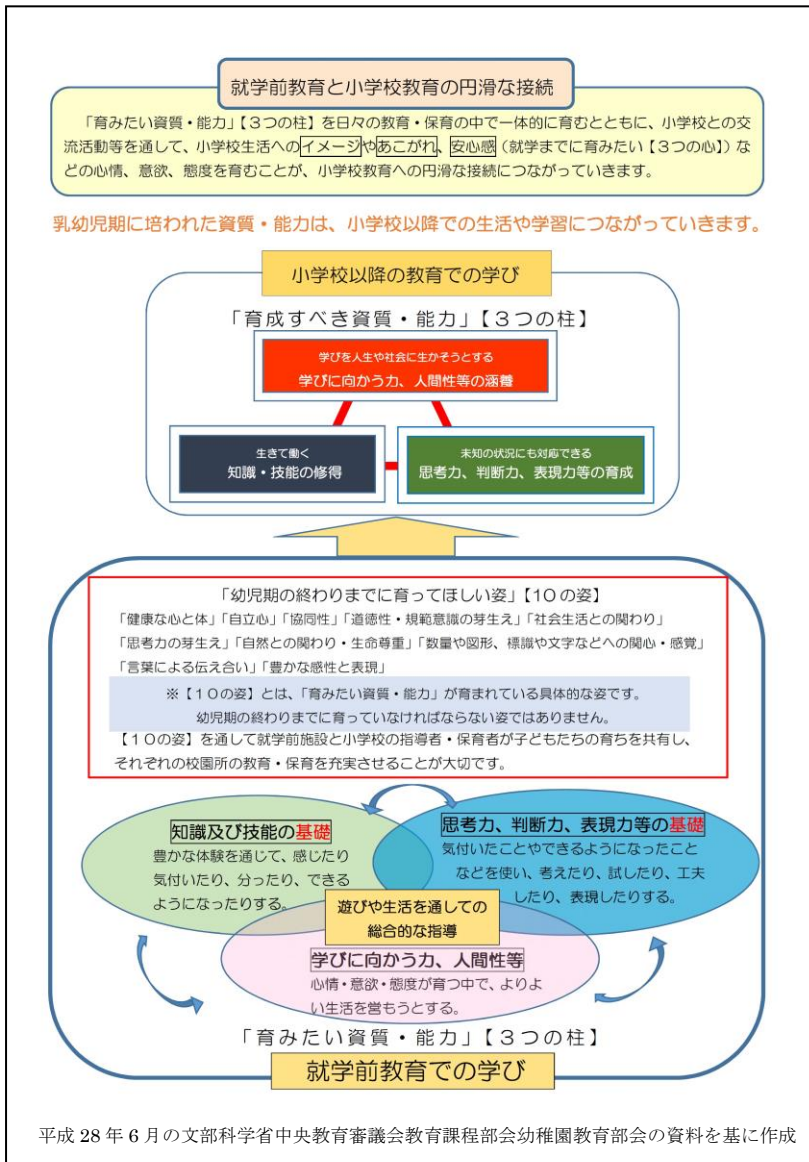
4 「3つの柱」と「10の姿」で教育課程をつなぐ

平成10年の中央教育審議会答申で「幼稚園・保育所から小学校への接続が円滑に行われるようにするために、情報提供の充実や教育内容の一層の連携が求められる」ようになり、平成13年の「幼児教育振興プログラム」に「幼稚園教育と小学校教育との円滑な移行や接続を図る観点にたって、幼稚園と小学校の連携を推進すること」が示されたことから、各地で「連携・接続」に関わる研究や取組が進められました。

しかし、この20年、子どもの「交流」活動は多様に取り組みされてきたものの、「教育課程をつなぐ」取組については、なかなか広まっていないのが現状です。

そこには、小学校が取り組まなければならないことの多さや、遊びを通して学ぶ就学前教育への理解度等もありますが、「教育課程をつなぐ」ことがイメージしにくいことも大きく起因しているように思います。「何を、どのようにつなげばよいのか」具体的な行動目標が見えにくいところにあるように思います。

今回の要領・指針等の改訂（改定）では、この点が可視化されました。遊びを通して学ぶ就学前教育活動と「教科学習」を中心とする小学校以降の教育活動を貫くものとして示された



「育みたい資質・能力」【3つの柱】、接続期の視点として示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」【10の姿】が、「連携・接続」の鍵になります。

どのような遊びを通して、どのような姿が見られるようになったのか、どのような力がついたのか、就学前施設と小学校の教職員が共有することが大切です。また、どのような学習を通して、どんな姿が見られるようになり、どんな力がついていくのか共有することも大切です。

このような取組を通して得た情報【3つの柱】や【10の姿】等を自施設の教育課程に書き込んでいくことで、「連携・接続」を意図した教育課程につながっていくのではないのでしょうか。

5 引き継ぎは、具体的な姿や支援を共有する

就学前施設では、幼稚園幼児指導要録、保育所児童保育要録、幼保連携型認定こども園園児指導要録の写しや抄本を小学校に送ります。小学校では、就学を前にして一人ひとりの子どもの生活や育ちの状況について、聞き取りをしたり保育時の様子を参観したりして、就学前施設と共有します。子ども一人ひとりが、円滑に小学校の生活に馴染み、個性や能力が発揮できるようにするための大切な引き継ぎです。

要録や抄本の他に、具体的な姿や支援を共有しながら引き継ぐことが大切です。この際にも、就学前施設においては育ちつつある子どもの姿（生活や育ちの状況、必要な支援）を〔10の姿〕を基にして伝え、小学校においては子どもの育ちを支援するための情報として〔10の姿〕を基に聞き取ることで、視点をもった具体的な引き継ぎになります。「育ちや学びの連続性」や「教育の一貫性」を意識した引き継ぎになるよう心がけたいものです。

また、就学を控えた時期だけでなく、5歳児の一定の時期から保育参観や連絡会等を通して子どもの姿を共有することも大切なことです。特別な支援を要する子どもについては、なおさら丁寧に引き継がねばなりません。

6 スタートカリキュラムは、子どもの育ちをベースに組み立てる

「第1章 3 事例集、調査研究報告、カリキュラム等の発行を通じた取組の推進(7)」(P. 14)で記載したように、小学校学習指導要領には、「(前文)・・・幼児期の教育の基礎の上に・・・」や「(総則) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫すること・・・」が明記され、同解説生活編には、「(改訂の要点)・・・幼児期における遊びを通じた総合的な学びから、各教科等における、より自覚的な学びに円滑に移行できるよう、入学当初において、生活科を中心として合科的・関連的な指導などの工夫(スタートカリキュラム)を行うこと・・・」とされ、とりわけ、入学当初の学びの在り方について、幼児期の教育や学びとの連続性を明確にした方向性が示されています。

さらに、同解説生活編に「(改訂の趣旨)・・・幼児期の教育との連携や接続を意識したスタートカリキュラムについて、生活科固有の課題としてではなく、教育課程全体を視野に入れた取組とすること。スタートカリキュラムの具体的な姿を明らかにするとともに、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等との関連についてもカリキュラム・マネジメントの視点から検討し、学校全体で取り組むスタートカリキュラムとする必要がある」とされています。

小学校では、自校のスタートカリキュラムが、生活ルールの習得や行事の配列だけになっていないか、幼児期の教育や学びに基づいたカリキュラムになっているか、小学校6年間の育ちを見通した上でのカリキュラムになっているか、何より自校の実態にあったものになっているかなど見直し改善するとともに、担当学年にとどまらず全ての教職員で共有された学校全体のものにすることが求められています。

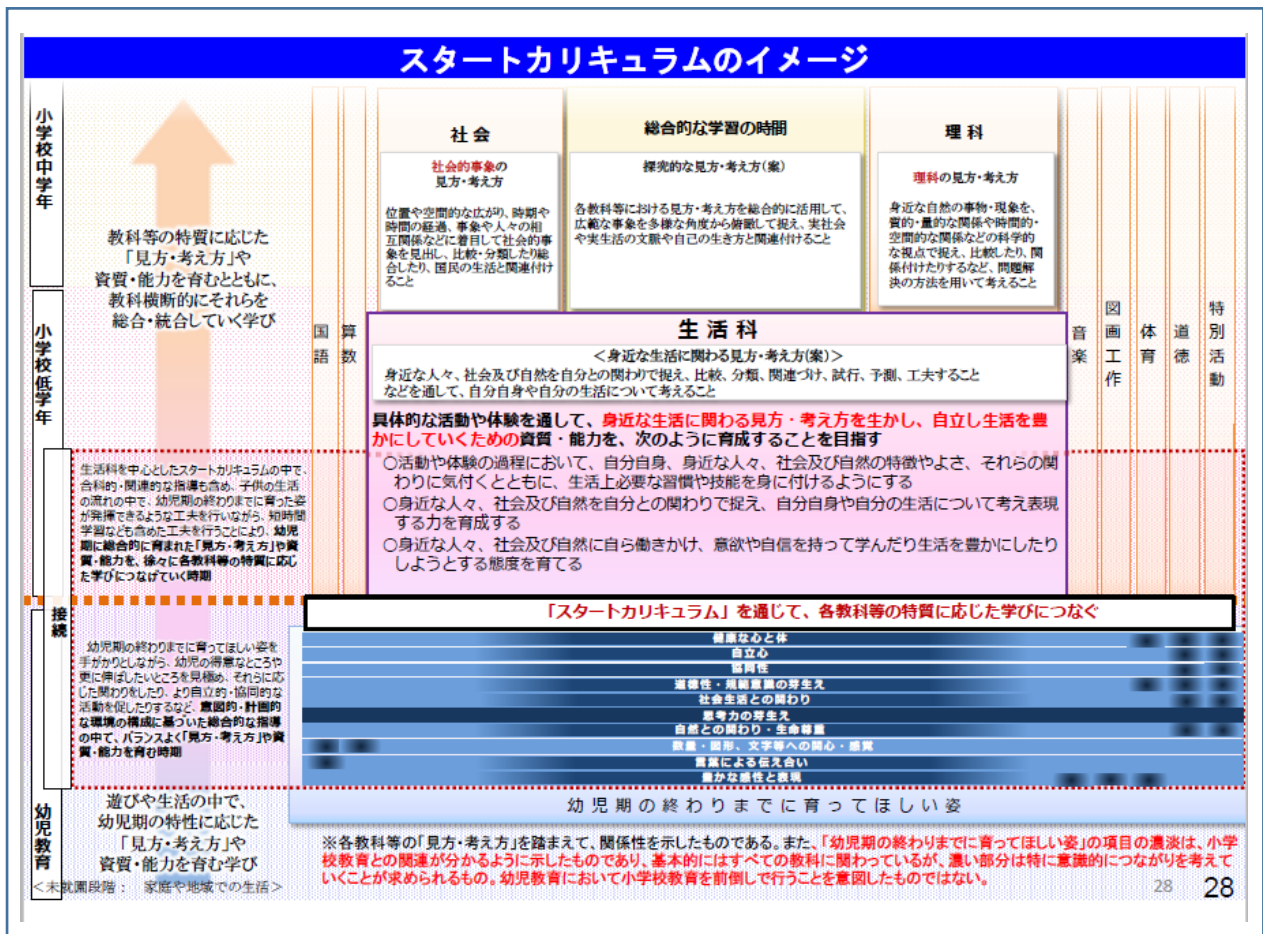
就学前施設と小学校との連携、就学前教育と小学校教育との円滑な接続について、相互参観や交流会という取組、5歳児や1年生のカリキュラムへの位置づけだけでなく、「発達の連続性」や「学びの連続性」の視点で、また「5歳児と1年生」の枠を越えた年齢や学年の視野で、「育みたい資質・能力」の育成の視点で、また保育や学習のねらいや内容、指導方法等の連続性や一貫性の視点に立って、幼児期の学びと児童期の学びをつなげていくことで、「連携・接続」は

さらに深まっていくのだと考えます。

「学びの連続性」を追究した教育課程の編成やカリキュラムの開発に関わる研究については、幼児期の教育・保育と小学校教育の連続性に関わる研究（『5領域における「言葉」や「表現」と小学校における「国語や言語活動」の接続研究、幼稚園における「数量や図形への関心・感覚」と小学校における「算数」の学びをつなげるカリキュラム開発』『3歳児～2年生までの自然とのふれあいに関わる年間計画の作成』『幼児期の保育と小学校の生活科や理科の学習との関連に関わる論考』等）も散見しますが、まだまだ広く実践化されているとは言えません。

言語や数量・図形、自然関係だけでなく、就学前施設で日々実践されている教育・保育で培われた資質・能力や「学びの芽生え」が、将来小学校の教科学習や生活へどのようにつながっていくのかを知ること、また反対に教科学習のねらいや内容につながる「学びの芽生え」が、幼児期のどのような遊びを通して獲得してきているのかを知ることが、「学びの連続性」や「教育の一貫性」を踏まえた教育・保育の実現に迫るものと考えます。

「学びの連続性」や「教育の一貫性」を意識して、学びの環境づくりや働きかけに生かすことが「連携・接続」の深まりにつながり、子どもたちの学びを豊かで確かなものにしていきます。



スタートカリキュラムのイメージ〔幼稚園教育要領の改訂について 文部科学省説明資料より〕

7 大阪市「就学前教育カリキュラム」を活用する



「連携・接続」の取組は、就学前施設と小学校のどちらかにウエイトがあるのではなく、就学前施設においては乳幼児期の子どもの発達の特徴を生かした自発的な活動としての遊びを通した学びにつながる教育・保育がなされ、小学校においては児童期の子どもの発達の特徴に即した真理を追究す

る主体的な学習につながる教育がなされていることが何より大切です。「連携・接続」は、それらの学びを効果的につなげるための教育的アプローチです。

「就学前教育カリキュラム」は、そうした乳幼児期の子どもたちの育ちの過程に基づいて、子どもたち一人ひとりが主体的に環境に関わり遊びに没頭する中で「学びの芽」が培われるように、どのような教育的意図をもって、どのような環境づくりや働きかけをすればよいのか、実践を基に作成したものです。また、小学校へ就学したばかりの子どもたちが、就学前の経験や学びを生かしながら小学校での生活や学習に円滑につながるようにするにはどのように導き援助し支援すればよいのか例示したものです。小学校との「連携・接続」の事例も示しています。「就学前教育カリキュラム」も合わせて「連携・接続」の参考にしてください。

8 子どもの“たい”を大切に育む

幼児期の教育では、「やってみたい」「知りたい」「伝えたい」等、一人ひとりの“たい”を大切にしています。そのために、指導者・保育者は子ども一人ひとりの興味や関心を探り、子どもたちが主体的に活動できる環境を整えていきます。そして、子どもの活動が持続・発展するように環境を再構成したり、「見守り、認め、共感したり、時には尋ね、相談にのり、提案したり」する教育的意図をもった働きかけをします。

小学校低学年、とりわけ、就学して間もない子どもたちにとっては、“たい”がつながる学習になるように、指導計画や展開、環境づくりや指導者の働きかけを工夫することで、子どもたちは、それぞれの個性や能力を思う存分発揮して活動し学習します。

活動や学習の中に関連する教科のねらいや内容を組み込み合科的・関連的な指導をしたり、15分単位で組み合わせたり、15分と45分を合わせて60分にしたりして、活動や学習内容に合わせた弾力的な時間割の設定をしたりするなど、指導者が柔軟に指導方法を工夫し子どもの“たい”を保障し支援することが、子どもたちの主体的な学びにつながっていきます。

9 就学前施設同士の連携を大切に

令和元年12月に実施した「保幼小交流会」後のアンケートで、「保幼小（就学前施設）のつながりをもつこと、一つ一つの施設の教育内容が小（小学校）に向けて身に付けていきたい力とそのプロセスについて大切なものを見失わないように共有することが必要だと思います。」というご意見をいただきました。

2年間の研究を通して、4つのブロックの就学前施設の中には、小学校との連携・接続だけでなく、就学前施設同士で子どもが遊びを通して交流したり、教職員が保育公開や子どもの姿を基にして交流したりする取組をしている施設があります。このような就学前施設同士の連携の取組の上に小学校との「連携・接続」の取組を展開しています。

「連携・接続」というと、就学前施設と小学校の連携・接続をイメージしがちですが、就学前施設と小学校の「縦の連携」の基盤には、就学前施設同士の「横の連携」があることを今一度確認しておく必要があると思います。就学前施設同士が子どもの育ちをどのように見るか、小学校にどのようにつながかを共有できれば一層深く強い連携・接続になるのではないのでしょうか。

本日の遊び（晴天時）

<ねらい>	<ul style="list-style-type: none"> ○体を動かしていろいろな遊びに挑戦し、存分に体を動かしたりルールを守って遊んだりすることを楽しむ。 ○たくさんのお友達と一緒に遊び、自分の思いや考えを言葉で伝え合う楽しさを味わう。
時程	【幼児の活動】 ○……各遊びのねらい ★……教育的意図をもった働きかけ
13:00	<p>○好きな遊びをする</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>【リレーをする】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○バトンをつなぐ面白さを感じ、いろいろな友達と競争しながら思いきり走ることを楽しむ。 ○グループの友達を応援し、ルールを守って遊ぶことを楽しむ。 ★教師と一緒に走り、走る楽しさを感じながら走る雰囲気を作る。 ★友達にバトンを渡すまでがしっかりと走り、息を止める。 ★競争しているグループがわかりやすいようにゼッケンを用意しておく。 ★バトンの受けがスムーズにいくようにする。 ★繰り返して遊ぶように、少し小さめのトラックにしておく。 ★ルールを伝えては十分に認めながら、ルールを守って遊ぶ大切さと楽しさを知らせる。 ★体罰や水分補給を適宜させる。 ★競争相手を選んでいるグループには、どう誘えばいいか考えられるように仕掛ける。 <p>バトン、コーン(角)×2、CD(が定の運動、ゼッケン)</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>【探検ごっこをする】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分なりに挑戦したり、工夫したりして多様に体を動かすことを楽しむ。 ○友達と同じイメージをもって遊ぶことを楽しむ。 ○遊具の安全な遊び方を覚えて遊ぶ楽しさを感じる。 ★探検のイメージをもって遊ぶように、コース内にあるいろいろな場所や具体的な言葉で、雰囲気盛り上げる。 ★コースは子どもたちが考えたものをベースにしたが、安全面や状況などを子どもたちの実態に応じて考える。 ★不安に感じている子どもがいたら、そばに寄り添いながら励ますことで、やってみようという気持ちに変わるようにする。 ★安全には十分に配慮し、子どもが繰り返して遊ぶようにコース全体を注意して見守る。 ★遊び方や遊び方を教えている姿を見守り、優しく話し合っている姿を認めることで、思いやりの気持ちが育つようにする。 ★身のこなしや体の重さなどを助言することで、運動能力やバランスなどが育つようにする。 ★同じグループの友達を探している子どもがいたら、どう探そうかと一緒に考えることで安心感を感じられるようにする。 ★安全な遊び方を模倣できるように言葉でかけ、特に運動遊具では十分に注意を促す。 <p>巧技台、マット、エース棒、手作りハードル、平均台、トンネル、フープ、回収器具、白線</p> </div> </div>
13:45	○片付ける
13:50	○今日の遊びを振り返る
14:10	○おわりのあいさつをする

【サッカー、的あてをする】

- 自分なりに目標をもって遊び、達成感や充実感を感じる。
- グループの友達と、競り方や投げ方を話し合ったりして遊ぶことを楽しむ。
- ★的の当たったり、ゴールに入ったりした喜びをしっかりと受け止め、共感することでさらに意欲が高まるようにする。
- ★何度も挑戦する姿を認め、教師も一緒に楽しむながら、競り足の思いやり、力加減、距離などを助言する。
- ★難易度をつけ、目標を持ちやすくする。
- ★グループの友達と遊び方を考え、楽しく遊んでいる姿を受け止めると共に、困ったことが起きていけば話し合っ解決できるように助言する。
- ★競り方や、手投げ、スピードなど、ボールの特徴を楽しんでいる姿を受け止める。
- ★他の遊びの場へ広がったボールはすぐに思いやりで行くように呼びかけることで、他の遊びも安全に保つ。

ソフトボール、ボール、サッカーボール、ボール回収ネット

【振り回りをする】

- 体を動かして遊んで、感じたことや体験したことなどを自分なりの言葉で周りの友達に伝えようとする。
- 自分の思いや考えを話したり友達と話をしたりすることで、友達と話し合える楽しさを感じる。
- ★自分の思いや考えを話したくなるような言葉をかけ、遊んで遊べるように言葉で促す。
- ★話しかけた後、話を聞いてくれる子どもがいたら、自分の思いや考えを話せるように促す。
- ★友達の話を聞いて感じたことや体験したことがない、聞いて聞けることで、思いや考えを共有できる。
- ★グループの友達と楽しめたことを伝え、喜びを感じている姿を受け止めることにも友達への関心も高める。

【餅やハバコで遊ぶ】

- 自分なりに挑戦する気持ちをもって取り組む。
- 友達と気持ちを合わせて遊ぶ楽しさを感じる。
- 運動遊具に興味や関心をもち、使っていることを楽しむ。
- ★体の個性を認識して動かすことができるように、遊具に応じて具体的に助言する。
- ★友達が挑戦している姿を応援したり、一緒に挑戦したりすることを楽しめるように、雰囲気を作る。
- ★繰り返しで、誰か一人だけだったり、また一人で誰か一人だけ友達と誰か一人、様々な遊び方を体験できるように仕掛けていくことで、どの子どもも無理なく取り組めるようにする。
- ★ハバコでは、起伏があるコースとなるように遊具を準備し、繰り返して楽しむように仕掛ける。
- ★一緒に誰か一人だけコースを回ったりすることで、グループの友達に親しむことができるように言葉でかける。

足場、大縄、ハバコ、エース棒、目印、積み木

Dブロック就学前施設同士の子どもとの交流 指導案より

〔できそうなことから取りかかりましょう！〕

(1) 研修に参加をする

「連携・接続」の研修会に参加したり、保育や授業を参観したり、取組発表や講師の講演を聞いたりして、「連携・接続」の必要性や何をすればよいのかイメージをもつことで、取組の方向性が見えてきます。

(2) 声をかけ合って始める

「一度、1年生の学習の様子を園児に見せてもらえませんか」

「今度、1年生の授業研究をするので、就学前施設の先生方見に来ませんか」

「来年度就学予定の子どもの様子を見ていただき、支援の方法を共有したいのですが…」

「1年生が生活科の授業で作ったおもちゃで一緒に遊ぶのですが、△△保育所の子どもたちも来られませんか」

就学前施設から小学校へ、小学校から就学前施設へ、かける言葉は様々ですが、声をかけ合って無理のない取組から始めてみてください。子どもの生き生きとした姿を見ることができず。先生方の気付きが日々の保育や指導の改善につながっていきます。

(3) 施設内の取組の枠を広げる

多くの小学校では、校内研究に教科や領域等を決めて実践研究をしておられることと思います。研究対象になった教科や領域等について、幼児期の学びも視野に入れて研究し蓄積していくという方法もあります。その際に、近隣就学前施設の協力を得ると双方の教職員の学びにつながっていきます。

その逆に就学前施設がその年に取り組む教育・保育に小学校教育への接続を視野に入れて取り組むことで、双方の教育・保育の質の向上につながれることもできます。

また、前にも触れましたが、校内授業研究（公開授業）や公開保育などを、「〇月〇日に、公開授業・公開保育をします。よければ見に来てください」と、互いに近隣の就学前施設（公私幼保の枠を超えて）や小学校に案内することでつながりが生まれます。

(4) スタートカリキュラムを作成する（見直す）

当センターで作成した大阪市「就学前教育カリキュラム」や文部科学省の「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム」、大阪府幼児教育センターの「スタートカリキュラム 学びの接続モデルリーフレット」等、国や自治体では、「連携・接続」に関わる刊行物が出されています。自校のスタートカリキュラムを作成したり見直したりする際には、是非参考にしてください。

また、その際に、近隣の就学前施設と共に作成することで、より子どもの実態に即したカリキュラムになるのではないかと考えています。

以上、「保幼小連携・接続」研修・研究から見えてきた「連携・接続」で大切にしたいことをあげてきました。自施設の教育・保育を「知ってもらおう」、他施設の教育・保育を「知ろうとする」この意識が「連携・接続」のスタートです。

就学前の子どもたちが「遊び」を通して獲得した「学びの芽生え」を小学校での学習に活かせるように、就学前施設と小学校双方の教職員が、一緒に考えていきたいものです。

あ と が き

大阪市保育・幼児教育センターが、「保幼小連携・接続研修」と「保幼小連携・接続研究」に取り組んで2年。2年ですが、「連携・接続」について、気付くこと、考えさせられることの多かった2年でもあります。

「保幼小連携・接続研究」においては、初めは、「連携・接続」のために何をどう進めるかよりも、互いの施設の状況や教育内容について交流する中で、「違うね」「そんなふうにするんだ」「そんなことも既にしているんだ」と『違い』に気付くことに多くの時間を費やしました。しかし、この時間こそが「連携・接続」にはとても重要であることが、この研究を通して分かりました。

「保幼小連携・接続研修」においても同様で、多くの参加者から、「各施設、それぞれの違いが分かってよかった」「もう少しグループワークの時間がほしかった」という感想をたくさんいただきました。子どもたちの学びもそうですが、大人の学びも互いを知ることから始まることを改めて感じました。

互いの『違い』を共有したからこそ、次にそれぞれの施設で「一層豊かな学びにつなげる」ために何をすればよいのかという見方ができてくるのだと思います。

「まずは、互いの保育や学習を参観しましょう」「管理職ではなく、次は、担当者が集まって交流した方がいいね」また、「参観と交流会、指導講評がセットで深まる」などの感想もいただき、「連携・接続」の方向性を垣間見ることができました。

まだまだ、この取組は始まったばかりです。4つのブロックの小学校、保育所（保育園）、幼稚園、認定こども園の管理職を始め教職員の皆様、ご指導いただいた講師の先生方には、時間を捻出して研究を進めていただいたことにお礼申し上げます。

ご尽力いただいた2年間の「保幼小連携・接続研究」記録と「保幼小連携・接続研修」の記録に、「連携・接続」の経過と少しの方向性を加え、“「保幼小連携・接続推進事業」平成30年度・令和元年度取組まとめ”を作成しました。

この2年間の取組まとめを各施設での「連携・接続」の取組の資料として活用していただくことで、「連携・接続」の取組がさらに進み、子どもたちの学びがより豊かになることを願っています。



保幼小連携・接続推進事業 平成30年度・令和元年度取組まとめ

令和2年7月 発行

編集・発行者 大阪市こども青少年局 大阪市保育・幼児教育センター

〒535-0031 大阪市旭区高殿 6-14-6

TEL 06-6952-0173 FAX 06-6952-0178